東京交響楽団
楽団員が語る
名曲のツボ
Vol.56

©N. Ikegami

首席ホルン奏者

大野 雄太

Yuta Ohno

Symphony No.3 "Eroica"
Ludwig van Beethoven

ベートーヴェン作曲 交響曲 第3番「英雄」

「英雄」とは誰?
その真実はホルンに隠されていた!?

今年生誕250周年のベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」は、「よくぞこの曲を書いてくれた!ありがとうベートーヴェン!」という気持ちになるほど、最初から最後までホルンが大活躍します。

ベートーヴェンの時代、ホルンは2本で1組の楽器と考えられていましたが、ベートーヴェンは「英雄」でなんとホルンを1人増員して3本使いました。奇数というのは異例中の異例。さらにホルンの全パートにソロを書いたのです。たとえば第1楽章には1番奏者はもちろん、再現部直前に2番奏者のソロがあります。他の楽器に先駆けて吹くので間違えたようにも聴こえてしまう、緊張の場面です。第2楽章では3番奏者に大きなソロがあります。あまりに重要なため、3人全員で吹くよう指示する指揮者もいるほどですが、最近は楽譜通りに1人で演奏することが多いです。こうして各奏者がソロを奏でたあと、第3楽章のトリオでは3人全員で狩のファンファーレを高らかに吹きます。

交響曲第3番でベートーヴェンは「3」にこだわったのでしょう、ホルンが3本で、調性は♭3つの変ホ長調。変ホ長調はヒーロー的な調性と言われており、ホルンの最も得意な調性でもあります。

ところで「英雄」とは誰なのでしょうか。ナポレオンのための作品と言われますが、本当にそうであるならば第2楽章に葬送行進曲なんて書かないですよね。また、曲の中でホルンを活躍させますが、ホルンは庶民を象徴する楽器。そもそもホルンは狩人の楽器でした。狩人とは、獲物を採って村人に提供する人、つまり庶民にとって身近なヒーローだったのです。ですので「英雄」とは、ナポレオンではなく、家族や地域を守る名もなきヒーローのことでは。第2楽章の葬送行進曲は、フランス革命によって庶民が戦争に参加し死ぬ時代になり、家族の大黒柱といった身近なヒーローの死を書いたのでは。そして作品全体に、これからの時代のヒーローは庶民だというメッセージを込めたのでは。だからホルンを活躍させたのでは、と僕は思っています。

ベートーヴェンはホルンをよく知っていたようで、「英雄」では当時ギリギリ演奏可能なことが要求されます。たとえば第4楽章最後に戻ってくる狩のファンファーレの速いタンギングがそう。ここでの記譜上のファの音は、当時の楽器では普通に吹いても出ない、ハンドストップ奏法(ベルを手で塞ぐ奏法)で出す音なのです。

ほかに「英雄」が革新的だと思う点は、第1楽章冒頭、和音2つだけで序奏が終わるところ。これは「ビックリ」なんだと指揮者ブリュッヘンも言っていましたが、当時の観客はさぞ驚いたことでしょう。僕がいつも楽しみなのは第1楽章最後。手をつないで踊るイメージで、ホルンが1人ずつ加わり主題を演奏します。このような音楽は通常ならホルンがリズムを担当しますが、ここではヴァイオリンにリズムを刻ませています。この時代に、庶民の楽器ホルンが美しい主題を朗々と吹くなんて! とても画期的です。

第4楽章は、僕にはクイズ番組に聴こえます。「さあ今週も始まりました! クイズ『どんな旋律でしょうか?』」と始まり、主題のベースラインが演奏されます。「これに合う旋律は? 分からない? じゃあ次のヒント!」と伴奏だけの音楽が進んでいく。こんな曲、今までにないですよね(笑)。実に斬新です。

演奏時間60分近い大曲の「英雄」。大活躍するホルンから「庶民の喜び」や「身近なヒーロー」を感じていただけたら嬉しいです。

ベートーヴェンは交響曲第3番「英雄」を書く3年前にホルン・ソナタを作曲。初演したジョヴァンニ・プント(1746〜1803)は当時最新の奏法ハンドストップをヨーロッパ中に広めた名ホルン奏者です。ベートーヴェンはおそらく彼からホルンについて学んだようです。

ミューザ川崎シンフォニーホール
&東京交響楽団
名曲全集 第158回
The Masterpiece Classics Series No.158
2020年6月21日日 14:00開演

指揮:沼尻竜典
ピアノ:マルカンドレ・アムラン

■ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73「皇帝」
■ベートーヴェン:交響曲 第3番 変ホ長調 作品55「英雄」

◎友の会料金 S ¥5,400 A ¥4,500 B ¥3,600 C ¥2,700
◎当日学生券(25歳以下の学生) ¥1,000(要問合せ)